

「由良はさ、自分が死んだら世界はどうなるんだろうって、思ったことない？」  
夕張はたまに変なことを言う。いつもと変わらない、しかしいつもよりも特別な天井を見上げながら、私は一つため息をついた。隣には夕張が私と同じように寝転んでいて、普段なら鉄のように冷たい手はひどく熱い。

「何、哲学の話？ それともメンタルヘルス？」

「どっちでもあるし、どっちでもないかな。あの日から私はどうかしちやってるし、由良だつてそうでしょ？ でも、今言いたいのは違うこと」

こんな状況だというのに、夕張の声は映画でも見た後のように弾んでいる。

「よくわかんない。私はあんたじゃないからさ、もっと分かりやすく言つて？」

わざと呆れたような声色で応えると、私を握る夕張の手にかすかに力がこもつた、気がした。

「うーん、じゃあ聞き方を変えるね。深海棲艦にはさ、生殖能力はあると思ふ？」

「……え、何、そういう話だったの!? 性的な方!?」

思わず大声を上げる私に、夕張は愉快そうにからからと笑った。肩は弾み、ベッドは小さな金属音とともに賑やかに揺れる。思い返してみても、彼女が私の前でこんなに楽しそうなところを見せるのは、いつぶりだろうか。お互い、ひどくつまらなくなつてしまつたから。今度は私が、彼女の手を強く握り返す。

「そういうことじゃなくてね。深海棲艦は放つておいても増えるのか、それとも、つてこと」

「……ああ、そういう」

そういえば、彼女はずつとこうだった。わざと回りくどい、持つて回つた話の進め方をして、私の反応を楽しんでいるような。久しぶりに見たそんな態度に、私はふと夕張の顔が見たくなつてくる。首を少し横に倒せばすぐそこにいるはずの、彼女の顔が。笑っているだろうか。面食らつて間抜け声を出す私を、笑つてくれているのだろうか。

そんなことを思いながらも、私はつまらない天井の模様を眺め続ける。今日はひどく暑い。首ひとつ動かすのも、嫌になるほどに。私は小さく息をついた。

「……ま、自然に増えるつてことはまずないでしょ。自然に減りもしないだろうけど」

「つてことはさ、私たちが海で沈まない限り、深海棲艦が増えることもないんだよね。それに今のところ、向こうから陸まで攻め込んでくる様子もないんだし」

ああ。そういうことか。夕張の声は余裕をなくし、私はため息で喉を灼く。

「だつて、深海棲艦のし、正体は、私たちが……この目で、見ちゃつ……た、んだし。だから！ これで、これでよかつたんだよね……？ こうすれば、全部……」

「夕張」

私が強く握つた手を、夕張はさらに強く握り返す。ああ、暑い。

「夕張。無理に思い出さなくていい。自己弁護もしなくていい。大丈夫、私たちのやつてゐることは、間違つてゐるから。でも、これが一番正解に近いから」

いつしか夕張の肩は小刻みに震え、かすかに嗚咽も聞こえてくる。遠くからは鐘の音。今さら何をしたつて無駄なのに。それにしても、今日は暑い。

「大丈夫、大丈夫だから。これで全部、終わるから」

夕張に言っているのか、それとも自分に言い聞かせてでもいるつもりなのか。私は黒ずんでいく天井をぼんやりと眺め続けた。

「……向こうに行つたら、五月雨ちゃんに謝らないとね。許して、くれるかな……」

「大丈夫よ。きっと許してくれる。私もあの子に謝らなきゃだし、それに」  
言つてから、一息つく。呼吸さえ、もはや満足にできやしなくて。

「謝らなきゃいけない相手は、他にいっぱい、いっぱいいるでしょ？ そつちの方が、許してくれるかも怪しいし」

「……ふふつ、確かに、そう」

一度、私を握る夕張の手に力がこもつてから、それはやがてさざ波のように消えていった。そうして私の意識も薄れていく。

燃えさかる鎮守府のベッドの上で、二人、手をつないだまま。

『cider』

発行 平成28年5月8日

著者 皆月蒼葉

発行者 びびび文庫